

令和元年6月17日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16925

研究課題名(和文) 漢代列侯喪葬儀礼の研究 皇帝・諸侯王との比較を通して見た

研究課題名(英文) Research on Funeral Rites of the Liehou Ranks in the Han Dynasty: Comparison between Emperors and Families of the Aristocracy

研究代表者

邊見 統 (Hemmi, Osamu)

学習院大学・文学部・講師

研究者番号：70756890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は皇帝陵・諸侯王墓・列侯墓の比較を通して、皇帝・諸侯王・列侯の国家秩序における位置づけを探ることを目的とした。

まず皇帝陵・諸侯王墓と列侯墓の規模には大きな差異がある。一方で皇帝陵と列侯墓とは平坦な土地に墳丘を築く、諸侯王墓は自然の丘陵を利用して築かれることが多い。

こうした差異は漢帝国における皇帝・諸侯王・列侯の位置づけの差異を示すだろう。前漢の建国者の高祖劉邦は諸侯王に推戴されて漢王から皇帝に即位した。よって漢帝国において、諸侯王は極めて高い地位を有していたと言える。他方、列侯は二十等爵制の最上位の爵位であり、爵制上、皇帝に極めて近くにあった。こうした地位が立地に反映されたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では諸侯王墓・列侯墓の調査を行い、それを踏まえて論文の発表や学会報告を行った。本研究の成果として発表した論文・学会報告においては、列侯に関する政治史的問題を検討し、前漢の政治における列侯の位置づけや役割の変化を考察した。

列侯は漢代二十等爵制における最高の爵位であり、漢帝国において重要な位置にあった。本研究において、皇帝・諸侯王との対比から、列侯について政治史検討を行ったことは、漢帝国の国家構造の考察において意義を有すると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is investigating positions of Emperors, Families of Aristocracy, and Liehou Ranks in the national order by comparing between their mausoleums. There is noticeable difference between them. Emperors' and Liehou Ranks' ones were built on artificial hills. Whereas, Families of Aristocracy's ones were mainly done by using natural hills. They reveal difference of their positions in the Han Dynasty. Liu Bang, King of Han, became Emperor Gaozu of Han enthroned by Families of Aristocracy. As a result, Families of Aristocracy occupied significant positions. On the other hand, Liehou Ranks were in the highest position in the system of twenty titles. It means that their rank was near the Emperor in this system. These status effects their location of mausoleums.

研究分野：中国古代史

キーワード：中国古代史 漢代史 諸侯王 列侯 皇帝

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中国漢代の列侯の喪葬儀礼と列侯墓について、皇帝・諸侯王と比較することで、漢帝国における列侯の位置づけ、皇帝と列侯の関係を明らかにすることを目的とした。

諸侯王は前漢の成立直後には、高祖の天下平定に貢献した者や有力者であったが、後に皇帝劉氏の一族が封建されるようになった。一方、列侯は、漢代の爵制「二十等爵制」の最高の爵位である。また諸侯王と並んで諸侯の1つにも数えられた。

近年、榑身智志「漢初高祖功臣位次考 前漢前半期における宗廟制度の展開と高祖功臣列侯の推移」(『東洋学報』90(4)、2009年)のように漢初の列侯に着目した研究がいくつか見られる。しかし研究開始当初には列侯を主たる考察対象とした研究成果は乏しく、この状況は現在も同様である。たとえば、爵制研究の主たる関心は民への爵位の賜与にある。また李開元『漢帝国の成立と劉邦集團 軍功受益階層の研究』(汲古書院、2000年)をはじめとして前漢成立期の政治史研究は盛んであり、建国の功臣への注目は大きい。列侯に関する問題は主たる考察対象とはされず、比重は小さいと言わざるを得ない。

しかしながら、上述のように列侯は二十等爵制の最高位の爵位である。しかも『史記』や『漢書』には前漢成立期の有力な功臣たちが列侯に封建されることを渴望していた様子が描かれ、また前漢後期にいたっても霍光・王莽といった外戚・実力者や諸侯王の子弟が列侯に封建されていた。こうした状況を見るに、列侯をめぐる問題を漢代を通して考察し、これを漢代の政治史・制度史のなかに位置づける必要があると考えた。

以上のような問題意識から、申請者はまず前漢成立期に封建された列侯を主たる考察対象として、文献史料および張家山漢簡「二年律令」を用いて研究を進めた。拙稿「列侯と関内侯

漢初における列侯封建の政治的意義をめぐって」(『東洋文庫中国古代地域史研究編』張家山漢簡『二年律令』の研究』東洋文庫、2014年)では、列侯と二十等爵制において列侯の1級下に位置する関内侯の差異を検討し、呂后期に列侯は皇帝劉氏や外戚呂氏、諸侯王と比較される地位にあり、関内侯以下の爵位とは隔絶した存在であったことを明らかにした。さらに拙稿「高祖系列侯位次の政治的意義 位次の制定と改定を中心に」(『史学雑誌』123(7)、2014年)では呂后期に制定された列侯の序列(高祖系列侯位次)について検討した。その結果、呂后は建国者である高祖の権威を継承して政治基盤を安定させるために高祖系列侯位次を制定したこと、また大臣が呂氏一族を滅ぼした後、傍系から皇帝に推戴された文帝が高祖系列侯位次を改定して功臣たちの支持獲得を図ったことを明らかにした。

このように、少なくとも前漢成立期には「列侯」が政治的に重要な要素であった。呂后や文帝は列侯の序列を制定・改定することで列侯と関係を取り結んで、政権の安定を図ったのである。そして上述のように霍光・王莽らも列侯に封建されていることから、前漢後期にいたっても列侯は政治的に大きな意義を有していたと考えられる。

そこで列侯を主たる考察対象として、漢代の政治史・制度史の検討を進めたいと考えた。具体的には、列侯の封建事例や列侯をめぐる制度、列侯の子孫に対する政策を中心として皇帝と列侯の関係を考察し、皇帝と最高の爵位を持つ列侯との関係を検討することで、漢帝国の政治体制や支配理念の変遷を明らかにすることができると考えた。

2. 研究の目的

上記のような学術的な背景を踏まえ、本研究では、特に列侯の墓および喪葬儀礼に着目して、皇帝と列侯がいかなる関係にあったのか、また両者の関係がどのように変化したのかを明らかにしたいと考えた。

古代中国の喪葬のあり方は時代・地域によって大きく異なっていた。その一方で、『後漢書』志6礼儀志下に見えるように、身分・地位によって副葬品も含め異なる喪葬儀礼が規定されていた。そして村元健一「前漢諸侯王墓と諸侯王の自殺」(『大阪歴史博物館紀要』4、2005年)は諸侯王の喪葬が皇帝に派遣された官吏の監督下にあったことを指摘するが、申請者は列侯も同様であったと考えた。すなわち、喪葬儀礼には被葬者の地位・身分や皇帝と被葬者の関係が色濃く反映されたと推測されるのである。

そして、中国では漢代の列侯やその家族の墓が数多く発見され、発掘結果も発表されている。しかし考古学的成果を網羅的に整理し、政治史・制度史に位置づけた研究は存在しない。

一方、列侯と並んで諸侯に位置づけられる諸侯王の墓については、まとまった研究成果が近年、刊行された。劉瑞・劉濤『西漢諸侯王陵墓制度研究』(中国社会科学出版社、2010年)、劉尊志『漢代諸侯王墓研究』(社会科学文献出版社、2012年)は、考古学的な視点から漢代の諸侯王墓を整理・比較した研究である。

また前漢の皇帝陵も陵墓本体の発掘は行われていないが、陪葬墓や陪葬坑の調査が進み、日本においても鶴間和幸「漢代皇帝陵・陵邑・成国渠 陵墓・陵邑空間と灌漑区の関係」(『古代文化』41(3)、1989年)など、歴史学・考古学の視点から多くの研究がある。さらに近年、申請者がリサーチ・アシスタントとして参加した日本學術振興会頭脳循環を加速化する若手研究者派遣プログラム「リモートセンシングデータを利用した黄河流域の歴史と環境」国際研究プログラム(代表者:鶴間和幸学習院大学教授)は、文献史料・考古資料だけでなく、人工衛星によって得られた画像や標高データも活用して、秦漢時代の皇帝陵の立地についての研究を進めた。

そこで本研究では、文献史料と考古資料、リモートセンシングの手法を活用して、列侯の喪

葬儀礼と列侯墓の立地を考察することを考えた。その際には、列侯単体で検討するのではなく、皇帝・諸侯王の事例と比較することによって、喪葬の面から漢帝国における列侯の位置づけとその変化を検討すべきであると考えた。そして本研究代表者は、拙稿「列侯と関内侯 漢初における列侯封建の政治的意義をめぐって」(前掲)において、漢初の列侯が皇帝劉氏・外戚呂氏・諸侯王と比較される存在であったことを指摘した。本研究において、喪葬儀礼や陵墓の立地に着目して、皇帝・諸侯王・列侯の間の差異を明らかにし、これを漢代の政治史・制度史に位置づけることによって、皇帝と列侯がいかなる関係にあったのか、また両者の関係がどのように変化したのかを明らかにすることができると考えた。

3. 研究の方法

本研究では、関連する文献史料を検討し、さらに皇帝陵・諸侯王墓・列侯墓について発掘報告書进行分析し、また諸侯王墓・列侯墓の現地調査を実施することで、文献史料と考古学的成果をあわせて考察した。

文献史料では、漢代の各時期における列侯を中心として、政治・制度の記述进行分析した。たとえば、漢初には諸侯王国の勢力が大きく、いわゆる「郡国制」が行われていたが、それは呉楚七国の乱を経て、実質的郡県制へと変化していった。このように漢代の政治・制度は、時期ごとに変化している。そして列侯についても、漢初には建国の功臣である、いわゆる高祖功臣の有力者が列侯に封建され、彼らを中心として、高祖功臣は政治的に大きな影響力を有した。しかし次第に影響力を喪失し、皇帝やその周辺に権力が集中した。それにとまって列侯の性格も変化した。ゆえに、文献史料をもとに列侯を含む漢代の政治・制度を検討することは基礎的な作業として、極めて重要であった。

一方、考古学的成果は、当時の状況を直接的に示すものである。よって、本研究では皇帝陵・諸侯王墓・列侯墓の発掘報告書进行分析し、また諸侯王墓・列侯墓の現地調査、さらに博物館においてそれらからの出土文物の調査を行った。現地調査は、2016年8月・2017年8月・2018年6月の3回、実施した。

(1)2016年8月の調査

江蘇省徐州市・揚州市の漢代の諸侯王墓・列侯墓やその一族の墓の調査を行った。

(2)2017年8月の調査

江西省南昌市の西漢海昏侯墓や湖南省の諸侯王墓の調査を実施した。

(3)2018年6月の調査

河南省永城市の梁王墓群や淮北地域の都城遺跡などの調査を行った。後者については諸侯王墓・列侯墓に限らず、淮北地域の地理環境を把握するために調査を実施した。

上記の作業・調査により、後述のように、文献史料からは見出せない知見を得た。しかしこれも文献史料とあわせて考察し、文献史料を考古学的成果によって相対化することにより得られたものである。また、現地調査に際しては、人工衛星によって得られた画像や標高データを入手・整理し、これらを踏まえて、現地の地形・環境を考えることで、より詳細に諸侯王墓・列侯墓の立地を考察することを企図した。

以上のように、本研究は、文献史料に基づいた政治史的・制度史的検討と、諸侯王墓・列侯墓に関する考古学的成果の分析ならびにそれらの現地調査とをあわせて考察することにより、皇帝・諸侯王・列侯の漢代国家秩序における位置づけや相互の関係を探ることを目指した。

4. 研究成果

上記のように、本研究では文献史料と考古学的成果とを用いて、漢代の列侯と皇帝・諸侯王の国家秩序における位置づけを喪葬儀礼に着目して検討することを目的とした。

皇帝陵・諸侯王墓・列侯墓に注目した場合、規模や立地について、それぞれの間には差異が存在する。

まず、規模について見た場合、皇帝陵・諸侯王墓と列侯墓とは大きく異なる。たとえば武帝茂陵は墳丘の各辺が200メートルを超え、諸侯王墓は自然の丘陵を活用した巨大な構造を有する。これに対して列侯墓の規模は小さい。たとえば南昌市西漢海昏侯墓は、列侯として没した廢帝賀を埋葬したものであり、正確な墳丘の規模は不明であるが、発掘報告書の図面を見る限り、30~40メートル程度と考えられる。

一方、立地・構造については、皇帝陵・列侯墓と諸侯王墓との間に差異が見られる。皇帝陵・列侯墓は多くの場合、平坦な土地に覆斗形と称される墳丘を築いたものであり、これに対して、本研究において調査を行った諸侯王墓は自然の丘陵を活用して築かれたものであった。

少なくとも皇帝陵と諸侯王墓の立地・構造の差異には、両者の性格が影響していると考えられる。前漢の高祖劉邦は、項羽を滅ぼして天下を平定した後、諸侯王に推戴されて、漢王から皇帝に即位した。そして漢代には郡国制が行われ、特に天下平定直後には、異姓諸侯王が強大な勢力を有した。その後、異姓諸侯王は皇帝劉氏の一族、すなわち同姓諸侯王に置き換えられたが、呉楚七国の乱に至るまで、やはり大きな勢力を有し、皇帝に対峙した。乱後、諸侯王の勢力は縮小し、実質的に郡県制と異なる体制となったとされるが、やはり形式的には郡国制であった。よって、漢の皇帝は、漢帝国の皇帝であるとともに、楚漢戦争期以来の漢王国の王としての性格も有したと言える。

一方で、漢は秦と同じく関中を基盤とし、秦の制度を継承したとされる。そして漢に先行す

る秦の始皇帝陵や二世皇帝陵は平坦な土地に墳丘を築いている。漢の皇帝陵が平坦な土地に墳丘を築くのは秦制を継承したものと考えられる。

これに対して諸侯王は東方に封建され、自然の丘陵に葬られた。ここに関中を基盤とする皇帝（漢王）と東方に置かれた諸侯王の性格・地位の差異が存在すると言える。ところで漢初に代王から即位した文帝は、霸陵に葬られたが、霸陵は自然の丘陵を用いて築かれた。文帝は即位したとはいえ、帝位継承の可能性のあった他の諸侯王と対立することとなった。霸陵造営は、薄葬とされるが、単に儉約を示すだけでなく、皇帝の地位を顕示する墳丘を築かず、諸侯王と同様に自然の丘陵を用いることで、帝位継承に由来する諸侯王の不満を緩和する意図があったものと推測される。

さて、列侯は二十等爵制の最上位の爵位である。爵制上、皇帝に極めて近い位置にあったと言える。列侯も諸侯王と同じく諸侯と見なされたことが『史記』・『漢書』より分かるが、諸侯王とは国家秩序における位置が異なる。先述のように高祖が諸侯王に推戴されて漢王から即位したことから、皇帝の漢王としての性格に注目した場合、皇帝と諸侯王の地位は近くなる。しかし列侯の場合は、初め建国の功臣が封建され、後には功績を挙げた者のほか、外戚や高官が封建された。よって、列侯はあくまで皇帝に依存する存在である。そのため、列侯墓は皇帝陵・諸侯王墓に比して規模が小さく、また立地・構造は皇帝陵に類似するのではないかと考えられる。

以上のように、考古学的成果に基づく考察からは、皇帝・諸侯王・列侯の地位の差異が、それぞれの陵墓の立地・構造・規模にあらわれたと考えることができる。これらの考察は、いまだ基礎的なものである。しかし皇帝・諸侯王・列侯は国家の最も上部を構成するものでありながら、皇帝陵・諸侯王墓・列侯墓の三者を比較検討した研究は乏しい。そのため本研究により、漢帝国の国会秩序の検討のための基礎的な知見を提示できたものとする。

一方で文献史料に基づく考察では、漢初の政治史における列侯の位置づけの変化を中心に検討を行った。それは、高祖期に高祖と列侯の間で交わされた「白馬之盟」において、功績のない者の列侯への封建が禁じられ、それが長く列侯封建を規定していたからである。無論、そうしたあり方は皇帝権力の強化により変質していくのであるが、それでもなお列侯封建において功績の有無が重視されていた。ゆえに本研究では、皇帝陵・諸侯王墓・列侯墓の検討とともに、後の時代に影響を与えたと考えられる漢初の列侯について考察を進めた。

漢初には建国の功臣である「高祖功臣」が大きな政治的影響力を有したと解されてきたが、以下に挙げた論文・報告では、高祖功臣の中でも列侯に封建された者が中心に位置したことを明らかにした。そして漢初の列侯は軍事的役割を果たすことで政治的地位を確保していたが、世代交替を経て軍事的役割を放棄し、そのために政治的地位を喪失した。しかし一方で、高祖によって封建された列侯の権威は残存し、前漢の後期に至っても皇帝の権威を高めるために、彼らの子孫が活用されたと述べた。

上記の研究は、漢初に封建された列侯に限ったものであるが、これにより今後、前漢後期や後漢の列侯について理解する際に、その基点となるものを提示できたと思う。

以上が本研究の成果であり、詳細は下記の論文・報告において示している。ただし、未調査の諸侯王墓・列侯墓も多くある。これらの調査を進めることで、皇帝・諸侯王・列侯の国家秩序における位置、ならびに漢帝国の国家構造を明らかにできるものとする。この点については今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

邊見統「前漢前期における高祖系列侯の衰退 高祖系列侯の紹封・復封・將軍職任用より見た」『学習院史学』第55号、2017年、63-85頁、査読有り

https://glim-re.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4412&item_no=1&page_id=13&block_id=21

邊見統「高祖系列侯と「復家」措置」『学習院大学文学部研究年報』第64輯、2018年、27-58頁、査読無し

https://glim-re.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4466&item_no=1&page_id=13&block_id=21

邊見統「漢初の諸侯」『日本秦漢史研究』第19号、2018年、32~55頁、査読有り

〔学会発表〕(計4件)

邊見統「前漢時代における周辺民族の列侯封建と漢朝政治」第32回学習院大学史学会大会、2016年

邊見統「南昌市西漢海昏侯墓と海昏侯劉賀」歴史学研究会アジア前近代史部会例会、2016年

邊見統「前漢時代における王子侯の封建」第6回若手アジア史論壇「日中歴史学研究的最新線」、2017年

邊見統「前漢の諸侯 諸侯王・列侯・関内侯」第29回日本秦漢史学会、2017年

〔図書〕(計0件)

特になし

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

特になし

取得状況（計0件）

特になし

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

特になし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。